

# あるむぜお

府中市郷土の森だより

No. 13

al museo



阿弥陀如来金銅仏立像（国 重要文化財）  
白糸台1丁目の染谷不動に伝わる、像高47cmの  
小像。背銘（写真右）から、弘長元（1261）年

に上州（現：群馬県）八幡庄の友澄入道が壇主  
となって造られたことがわかります。郷土の森  
では、複製を作成して常設展示しています。

## マルチスライド「くらやみ祭」

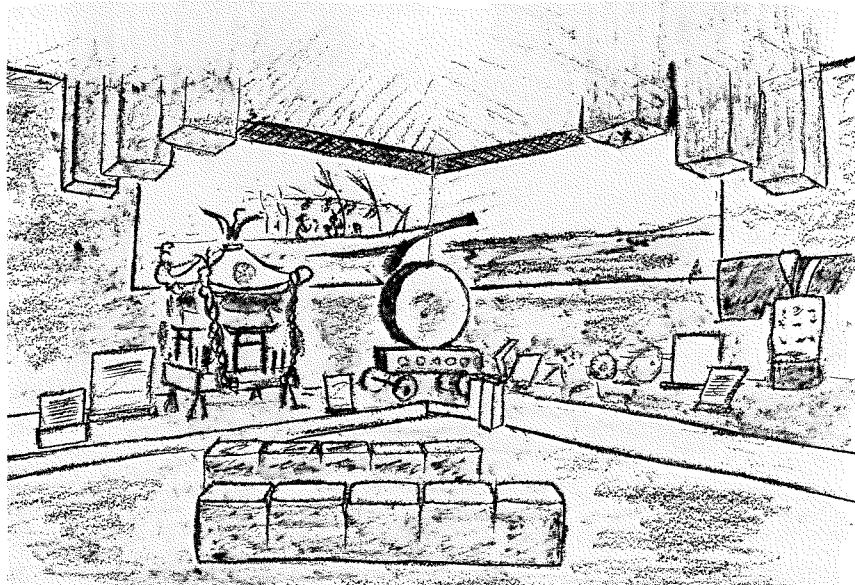
府中といえば、大国魂神社のくらやみ祭が有名です。最高の盛りあがりを見せる神輿渡御は、5月5日午後4時の号砲とともに始まり、本殿から発御した8基の神輿に大太鼓が加わり、御旅所まで練り歩く勇壮な祭となっています。例年市内外から数十万人もの見物客で賑わい、大国魂神社境内はもとより旧甲州街道の沿道は、見物の人であふれんばかりとなります。

江戸時代の『江戸名所図会』や『武蔵名勝図会』などにも、祭の様子がいきいきと描かれています。この祭のことを六所祭や六所宮祭と呼ぶことがあります。12、3世紀頃、武蔵国の著名な6神社を合祀し、六所宮と称したことによるものです。六所宮時代、一之宮から六之宮の各神輿が実際に御神体をのせて府中にやってきたものと考えられますが、この6基の神輿に、御本社、御霊宮の神輿を加えた8基の神輿による神幸の形式が、いつの頃からか整えられてきます。明治に入ると、8基の神輿の維持、管理が府中四か町（本町、番場宿、新宿、八幡宿）に2基ずつ移管、神輿講中が形成され現在に至つ

ています。

くらやみ祭というと、ふつう5月5日の神輿渡御を指しますが、正式には大国魂神社例大祭といい、4月30日の品川海上禊祓式（潮盛）から5月6日の神輿還御、鎮座祭までの神事の総称です。その間神輿渡御（5日）をはじめ、けやき並木で行われる競馬（3日）、神社では御鏡磨（2日）、御綱祭（4日）、そして御旅所国造代奉弊の儀、野口飯屋の儀、流鏝馬の式など多くの神事が執行されているのです。この延7日間にわたる祭のほぼ全様を、祭に携わる人々を中心に編集したものが、マルチスライド「くらやみ祭」（約7分）です。スライドプロジェクター12台、スライド約700枚を使用し、縦2m、横11mの画面いっぱい新緑のけやきを写したり、左右に2分割、また6分割にした画面で構成されています。

新緑の大国魂神社境内を中心にくり広げられる大国魂神社例大祭、そこには祭の興奮とともに、人々のいきいきとした表情が写し出されます。府中市民にとって、くらやみ祭は生活に根づいた年中行事にちがいません。くらやみ祭が終わり、ホッとした空気が漂うなか、なにげなくけやきを眺めてみると、新緑から深緑へと季節は移っていくようです。マルチ映像の展開とステレオ音響による「くらやみ祭」、椅子に坐ってゆっくりお楽しみください。（G）



# 昆虫編

前号で紹介した植物群落の調査のように、形の決まった方法（ワク法など）は昆虫の野外調査にはありません。研究者が目的に応じた方法で、独自の進め方を用いるのが普通です。昆虫は動物ですから、一か所に留まっている植物とは異なり、まず存在を確認することからして骨の折れる作業です。ここでは、必然的に各々の種類の確認、観察そのものがフィールド調査ということになるかと思えます。

### ＝身近な観察＝

昆虫は非常に種類が多く、またそれだけに生態や行動の違いが千差万別で、ごく一部を除いて詳しい生態がほとんどわかっていません。従って種々の昆虫の暮らしを知るためには、何度もフィールドに足を運ぶ必要があります。観察の目が肥えてくると色々なことが見えてきます。たとえばすみ場所ひとつでさえ、草原に生活するもの、木の上に生活するもの、地面の上に生活するものなど様々で、さらには日陰を好むもの、逆に日向を好むものがあることに気がつくでしょう。すみかがわかったら、その昆虫が何をしているのかに注目します。観察が容易に行えるのは摂餌行動です。花の咲いているところには、大抵蜜を吸ったり、花粉を食べている昆虫が見つかります。ただし、偶然にとまっている場合や、オスが花にくるメスを待ち伏せしている場合もあるわけです。初期の段階では、何をしているのかが分からなくても常に注意深く昆虫をみつめることで、その行動パターンを察知する練習を重ね、興味をもって経験を積むことが調査の第一歩につながります。

### ＝昆虫相を調べる＝

初歩の観察が調査の基本なら、さらに専門的な内容で研究の対象とされるのは、昆虫相の分布調査になるでしょう。植物と同様に、それぞ

れの場所にどんな種類が生息するのかを明らかにすることが目的ですが、その方法は独自の発想で行うものです。比較的、対象とする昆虫の種類を絞った方が初級者には行い易いのですが、ここでは一群を対象とした身近な方法を紹介します。たとえばチョウのグループを調べるとき、ある地域内で森林、草原、田畑などについて昆虫相を出し、その全体の中で優占種を求めます（シジミチョウ、ヒカゲチョウ、その他が確認され、そのうちアゲハチョウ類が一番多い、といった具合）。この方法は前回の植物群落調査と同じものです。このとき、川で調べれば上・中・下流、山であれば低・中・高山帯に分けてまとめるといいでしょう。また、まわりの植物相も含めて調べると、食草との関連も明らかにされ、より興味深い結果が得られることになり

### ＝調査の進め方＝

生態的分布調査は、各種個体数の多い少ないに注目することが望ましいのですが、実際は難しい場合が多いことは冒頭で述べたとおりです。植物同様＋、土の符号を用いて大体の傾向を示す報告例も少なくありません。なるべく個体数の多少を得る方向で、調査方法を発案するのが大変なところなのです。水生昆虫などでは、一定のすくい取り回数で何個体採取されたかをカウントできます。こうした数値的表現が可能ならば、調査地点の環境を明確にすることができます。Iの池ではA～Dの種類が確認され、Bが優占種はC、となれば、相関係数を求めることで、二つの池の類似性を判断する好材料となります。フィールド調査がそれぞれの環境を推定する手段として重要な役割を持つことの証明でもあるわけです。

## 六 所 の 森

遠藤 吉次

大正5年(1916)府中町青年会により刊行された『武蔵国府名蹟誌』によると、当時の大国魂神社は、「境内一千余年の老杉大櫨、蒼鬱として密生し、就中神木公孫樹(周囲三十尺)馬場大門の大櫨(周囲三十尺)枝葉天を覆ひ、実に稀世の名木たり。当社に参拝せんとするもの、一たび此の地に足を進むれば、靈氣自から人に迫るを覺ゆべし」と記されており、いまだ杉やケヤキの大木が鬱蒼と生い茂るその幽邃な境内の有様を覚えている人も少なくないと思います。

それでは、かつて大国魂神社の境内地にどれ程の樹木が繁茂していたかといいますと、明治14年3月の「大国魂神社立木取調」(大国魂神社文書)によれば、それは表のとおりです。

これはケヤキ並木を含めた境内地に生育する周囲6尺(約1.8m)以上の樹木を書上げたもので、総数は174本にのぼっています。内訳は杉が最も多くて104本、ついで楓(ケヤキ)が44本、その他が26本となっています。楓はその大半がケヤキ並木のものと思われるので、境内はほとんど杉の大木でおおわれていたことがわかります。立木のうち、周囲1丈(約3m)以上の巨木は56本あり、杉が30本、楓が22本を占め、縦・トチ・棕・銀杏が各1本となっています。一番太いのは本殿裏に現存する大銀杏で、当時周囲が3丈(約9m)と記されています。

以上は明治14年の資料ですが、それから66年さかのぼった江戸後期の文化12年(1815)の資料(東京農工大学名誉教授中村克哉先生が紹介された大国魂神社文書)によりますと、社地内の樹木は周囲1丈以上のものだけでも196本もあり、そのうち杉が133本を数えています。明治14年当時1丈以上の樹が56本であったことを考えますと、江戸後期の六所宮(明治4年に大国魂神社と改称)の境内は、その数倍もの大樹老木が繁茂し、まさに昼なお暗き幽邃な神域であったことが窺われます。

ところで、こうした鬱蒼とした社叢も、ただ

ほうっておけば良いという訳では勿論なく、当時でもその維持管理には並々ならぬ努力が必要でした。

この時代には、現在問題となっている公害こそありませんでしたが、やはりそれなりに樹木を損うさまざまな要因があり、毎年多くの社木があるいは倒れ、あるいは立枯れていきました。それらの要因の1つが強風による“風折れ”であり、台風等による社木の被害はけっして少なくありませんでした。

杉104本	43本	周 6尺以上7尺未満
	7本	7尺以上8尺未満
	16本	8尺以上9尺未満
	8本	9尺以上1丈未満
	3本	1丈以上1丈1尺未満
	8本	1丈1尺以上1丈2尺未満
	3本	1丈2尺以上1丈3尺未満
	7本	1丈3尺以上1丈4尺未満
	4本	1丈4尺以上1丈5尺未満
	3本	1丈5尺以上1丈6尺未満
	2本	1丈6尺
楓 44本	2本	6尺以上7尺未満
	8本	7尺以上8尺未満
	3本	8尺以上9尺未満
	9本	9尺以上1丈未満
	4本	1丈以上1丈1尺未満
	7本	1丈1尺以上1丈2尺未満
	5本	1丈2尺以上1丈3尺未満
	2本	1丈3尺以上1丈5尺未満
	3本	1丈5尺以上1丈6尺未満
	1本	1丈8尺
榎 5本	4本	6尺以上8尺5寸未満
	1本	1丈1尺
桜 2本	1本	6尺
	1本	9尺
縦	1本	1丈2尺5寸
トチ	1本	1丈2尺5寸
楓	1本	6尺
ソコ	6本	6尺以上7尺5寸
棕	9本	6尺以上1丈未満
銀杏	1本	3丈

明治14年(1881)3月大国魂神社立木取調  
(大国魂神社文書)

たとえば延宝<sup>えんぼう</sup>8年(1680)8月の暴風雨では大小28本の境内の杉が吹折れており、安永元年(1772)8月にはやはり杉53本、安政3年(1856)8月には境内の杉18本・槻5本・雑樹数十本をはじめ末社境内の立木29本が倒れています。

次に火災があります。枝と枝との摩擦<sup>まさつ</sup>による発火を原因とするものもありましたが、やはり隣接する府中宿の出火による類焼の被害が大きかったようで、文政9年(1826)11月には大小30本が焼木となっています。

しかし当時から最も大きな問題となっていたのは“立枯れ”で、その原因は鴉<sup>う</sup>や鶯<sup>さぎ</sup>の営巣<sup>えいそう</sup>でした。これはかなり早い時期から問題となっていたようで、すでに宝永8年(1711)2月に、社地の神木に巣くう鳥類をおどすための鉄砲の使用願いが出されています。

六所宮の社木へ鳥が巣くう有様は、当時でもかなりひどく、また目立ったものと見え、この地を訪れた文人達の紀行文にもしばしば見られます。たとえば文政元年(1818)の釈敬順<sup>しやくけいじゆん</sup>の『遊歴雑記』には

此処より双方松杉の大木繁茂し、高さおのおの数十丈、太さ四抱五抱もあるもの<sup>きん</sup>にかぞふべからず、此左右の林中に数千<sup>さきう</sup>の鶯鴉の鳥<sup>おびただ</sup> 夥しく、樹上を住家とし、尿によりて樹上の頂上より枝々まで皆白く、尿によって立枯<sup>びろう</sup>になりしもありて、茂林の中甚おさく尾籠たるも、……

とあり、文化元年(1804)の露庵有佐<sup>ろあんゆうさ</sup>の『玉花勝覧』には

花と見し梢<sup>こずえ</sup>は鶯<sup>さぎ</sup>の<sup>ねぐら</sup> 万葉  
という句が見えます。

この鴉や鶯の営巣による杉の立枯れは著しく、安永4年(1775)には7本、天明6年(1786)には8本、文化元年(1804)には8本、文政4年(1821)には10本と、それぞれ立枯れとなった杉を伐採しています。

これに対し神社としても、ほとんど毎年のように職人を雇って木に登らせ巣崩しを行ったり、鳥おどし用の案山子<sup>かかし</sup>や鳴子の取付けを行うなど、さまざまな対策を講じていることが、その勘定帳等から窺われますが、残念ながら効果はあが

らなかったようです。“立枯れ”は単にその木が枯れるのみならず、火災の際被害を助長する原因ともなり、社叢は勿論社殿の維持という面でも深刻な問題となっていました。

社木の立枯れが防止できない以上、社叢を維持するには補植<sup>ほしょく</sup>するしか方法はありません。このため六所宮では実にひん繫に苗木の植付けを行っています。例えば文化12年・文政4年・同5年・同9年、同12年・天保5年・同6年・同14年……という具合に苗木代や植付の手間代が支出されています。それはとりもなおさず、社木の“立枯れ”や“風折れ”そして焼木等がいかに多かったかを物語っています。

こうして大国魂神社では、江戸時代以来、社木の保護に並々ならぬ努力を傾けてきましたが、残念ながら鴉や鶯の営巣に起因すると思われる社木の立枯れはその後もやまず、昭和30年代の末に至り、ついに境内の杉の木はほとんど全滅<sup>ぜんめつ</sup>、その数は600本にのぼったといわれます。

その後、宮の森の消失を惜しむ人々によって新たな植樹が行われ、境内は再び深い緑をとり戻し、現在では市街地の中の緑のオアシスとして、市民に“やすらぎ”と“うるおい”を与えるまでになりました。



杉の大木の繁茂していた頃の大国魂神社境内

## —最近の発掘調査から—

今回は、古代の住替えに関するお話です。奈良・平安時代に、府中に住んでいた人たちの大多数は、竪穴住居に住んでいたものと考えられています。しかし、竪穴住居は柱を地面に埋め込んで屋根部分を支えているため、柱が地面に埋れた部分から腐りはじめ、あまり長期間1軒の竪穴住居に住み続けることはできなかったと考えられています。そこで、あらたに竪穴住居を造るわけですが、建築材料については、すべて新しいものを調達していたわけではないことが最近の調査で明らかになってきました。

以前より、竪穴住居のカマドの調査をしていますと、カマドを形作る粘土の量が非常に少ない例や、古い時期のカマドの粘土には良質なものが多いのに対して、新しい時期のカマドの粘土は平均的に不純物を含んでいる傾向があるといった特徴がありました。このことから、カマドに使われている粘土は、使い回しが行われ、次第に不純物が混じっていったことが想像されていました。また、カマドの焚き口部分には、古くなった土器や瓦・河原石・砂岩質の切石が用いられていることが多いのですが、これらの物が見つからない場合でも、それを抜取った跡と考えられる穴が残っている事がよくあります。さらに、場合によっては、その穴のなかに抜取り損ねた切石の破片が残っている例も見られ、再利用が盛んに行われていたことを想像していました。

今回の例は、カマドの焚き口部分に使って

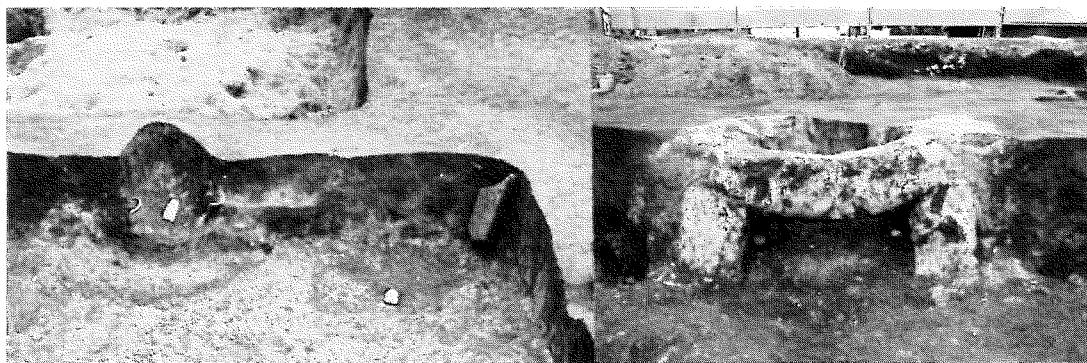
た切石をカマドから取り外し、それを竪穴住居の隅に置いたまま、持ち出さずに置き忘れてしまったと考えられるものです。

カマドは粘土を積みあげて築いているわけですが、焚き口に関しては、薪を入れる際に当って崩れやすいためか、耐火性がある硬い材質のものを用いていることが多いようです。

砂岩質の切石を用いている場合は、高さ30cm、幅10cm、奥行20cm前後の切石を左右に置き、その上に高さ10cm、幅60cm、奥行20cm前後の切石を載せ、鳥居のような形に組み上げています。しかし、説明したように完全な形で見つかったのは、市内でも美好町の西川宅地区など数例しかありません。ところが、左右の切石だけが残っている例は数多くあります。これは、天井部の切石が何らかの理由で破損した場合、左右の切石に再利用できるので、左右の切石に比べて天井部の切石が利用価値があったためと考えられます。また、裏面に火を受けた痕跡のある左右の切石も見つかっていて、明らかに再利用が行われていたことがわかります。今回の、美好町の都堂住宅を建て替える際に検出したものも、天井の切石だけを持ち出そうとした例です。

これらのことから、上屋を造る部材は、ほとんどが木でできているため残ってはいませんが、これらも再利用がされていたと想像でき、当時の物を大切に生活ぶりがかがえします。

(美好町 西川宅地区・都堂美好町1丁目第6地区の調査から 荒井)



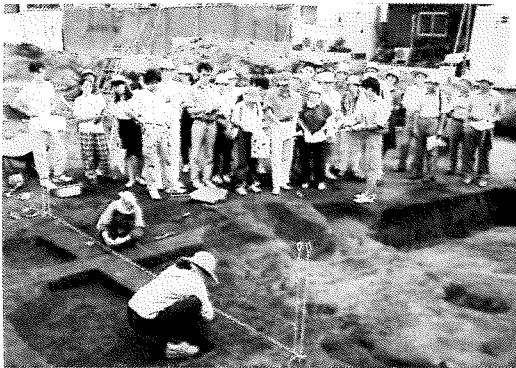
都堂美好町1丁目第6地区

西川宅地区



▲7/22～9/2 特別展「ミクロの世界」

身近にはなかなか見られない、微小な世界の探究ゾーン。この夏の特別展「ミクロの世界」のテーマです。顕微鏡を通して、雑木林の生き物たちは何を語ってくれましたか？熱心な子供たちの視線が印象的でした。

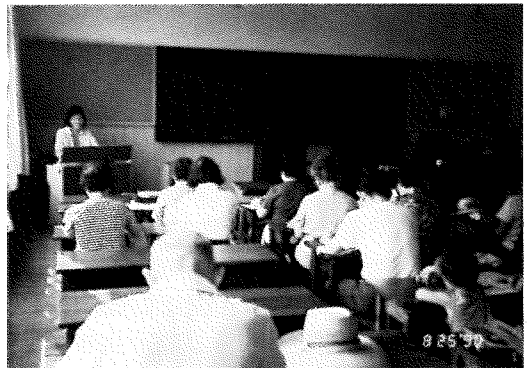


◀8/25 初級考古学講座

武蔵国府を主題にした、全5回の連続講座。第2回目は、市内2か所の発掘現場を見学。さまざまな質問がとびかかっていました。

8/25・26 唱歌の集い▶

園内日府中尋常高等小学校の教室で「唱歌を聴く会」。唱歌の歴史を学んだり、オルガンや木琴に合わせて聴いたり歌ったり…。翌日は野外ステージで「唱歌を歌う会」をしました。



あれこれ

## 秋の栗祭

前回紹介した大国魂神社の<sup>すもも</sup>李子祭に続くのが、9月28日の<sup>くり</sup>栗祭です。写真は高度成長たけなわの1965年（昭和40年）頃の光景です。

この日は、古くは伊勢や<sup>みたけ</sup>御岳から<sup>かぐらし</sup>神楽師を迎え、<sup>たいだい</sup>太々神楽を神社で競演する日でした。そのための講もあり、にぎやかな祭だったといま

すが、明治以降は次第に<sup>すた</sup>廃れていきました。

ところが、大正の終わり頃この祭を何とか再興したいと考え、府中の商人頭が中心となって始めたのが栗祭だったので。近郊は栗の産地で、特に<sup>おしたて</sup>小金井の栗は、府中<sup>おしたて</sup>押立村出身の代官川崎平右衛門が栽培を始めたといういわくつきのものだったので。

今では、栗よりも参道を埋めつくす<sup>あんどん</sup>行燈が美しい祭となっています。お彼岸が明け、秋の気配を一段と感じる頃、<sup>りようふう</sup>涼風にゆらめく燈の列はまた格別です。

大国魂神社の例大祭（くらやみ祭）も、江戸時代の神官中心のおごそかな祭から、各地の講中が中心となる祝祭的な都市の祭へと大きく変容していきました。日本人の長い伝統で<sup>つちかた</sup>培われてきた祭も、各時代の社会状況のなかで、形も目的もさまざまに変化していくという事実も忘れてはなりません。（〇）



インフラ  
ミュージジ

企画展

## 「日本の岩石・鉱物と化石展」

9月23日(日)～10月28日(日)

館蔵の岩石・鉱物を中心に展示会を行います。陳列する標本は 200種以上。いずれも、列島各地の鉱山や鉱脈のある山地で採集されたものです。あわせて、黒土や赤土の中の鉱物も紹介し、富士山などの火山活動との関連も解説します。

なお、府中周辺で採集された化石も紹介します。

あるむせお 第13号

al museo イタリア語

“博物館で”“博物館にて”の意

発行年月日 平成2年9月22日

発行 府中市郷土の森

〒183 東京都府中市南町6-32

☎0423-68-7921